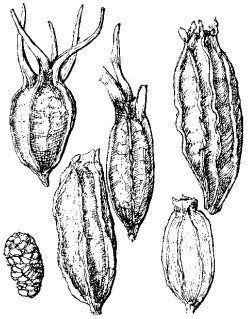


音順	生薬名	中医の性味・帰経	中医の用量
		中医学生薬解説、参考・使用上の注意 および中医学以外の生薬解説・生薬学解説	
さー8	さんしし 山梔子 (梔子)	苦・寒 心・肺・肝・胃・三焦	3~9g、煎服。外用には適量とする。
	 <p>クチナシの成熟果実</p>	<p>中医生薬解説</p> <p>清熱瀉火・除煩 外感熱病の胸中鬱熱で胸中が熱苦しく、不快、不眠などを呈するときに、透熱散邪の香鼓と用いる「梔子鼓湯」。 三焦実火の高熱、意識障害、うわごとなどには、黄芩・黄連・黄柏などと用いる「黄連解毒湯」。 肝火による目の充血や腫脹疼痛、口が苦い、口渇、胸が熱苦しいなどの症候には、菊花・黄芩・竜胆草などと用いる「竜胆瀉肝湯」。</p> <p>清熱利湿 湿熱の黄疸に、茵陳・黄柏・大黄などと用いる「茵陳蒿湯」「梔子柏皮湯」。 膀胱湿熱による排尿痛、排尿困難、尿の混濁に、生地黄・車前子・木通・滑石・沢瀉などと用いる「五淋散」「八正散」。</p> <p>清熱涼血・止血 血熱妄行の吐血、鼻出血、血便、血尿、皮下出血などに、大黄・黄柏・黄連・茅根・側柏葉などと用いる「梔子金花丸」「十灰散」。</p> <p>清熱解毒 熱毒による瘡癤（皮膚化膿症）に、黄連・黄芩・金銀花・連翹などと用いる「清上防風湯」「柴胡清肝湯」。</p> <p>その他 打撲、捻挫による腫脹、疼痛や火傷、熱傷に、生山梔子の粉末を外用する。</p> <p>参考 生用すると清熱瀉火に、炒用（炒梔子・焦梔子・黒梔子）すると涼血止血には働く、姜汁で炒すと止嘔除煩の効能が得られる。 外熱には皮（山梔皮）を、内熱には仁（山梔仁）を使用するのがよいとされているが、現在では全体を用いている。</p> <p>使用上の注意 苦寒で脾陽を損傷し易く、緩瀉の効能をもつので、脾虚の軟便や下痢傾向の者には用いない。</p>	
	<p>中医以外の生薬解説</p> <p>神農本草経 味苦寒、五内邪氣、胃中熱氣、面赤、<small>しゅうほうきび</small>酒皰皰鼻、白癩、瘡瘍を主どる。</p> <p>「方剤決定のコツ」の注釈 「五内邪氣」とは、5つの身体内に起きた邪気で、ここでは熱邪氣とかを言う。「酒皰皰鼻」とは、酒渣鼻で、酒の熱によって鼻の頭が赤くなるも言う。「白癩」とは、皮膚が白く、又は赤く腫れて爛れるかさおできのこと。 「白癩」は、漢方用語大辞典によれば「悪風が皮膚と血分の間を侵襲し、鬱火して血液を耗損して生じる。初め皮膚に起こり、色が次第に白く変わり、四肢頑麻、肢節発熱、手足無力、患部の筋肉は針で刺された様に疼痛し、声音は枯れて出なくなり、両眼は視る物がハッキリ見えないなどを現わす」と記されている。</p>		
	<p>薬徴 主治心煩なり、旁ら発黄を治す。</p> <p>新古方薬囊 熱を去り、胸中のもだえ苦しみを除き、或は心中の痛みを鎮め、又はのどの室がりを開き、又、よく不眠を治す。梔子は熱を去るが主能なれば、平常冷え性にて腹下り易き者などには宜しからず。但し、内に熱ありて下利し、又は下劑を用ひて強いて下し、其の餘毒が去らずして下り居る者には用ふる事あり。</p> <p>「方剤決定のコツ」の注釈 梔子は内熱を去るのが主能であるから、平常冷え性で腹が下り易い人などには用いてはならない。ただし「内熱があつて、下痢する時とか、下劑を用いて強いて下し、その余毒が去らずして下っている者に用いることがある」と記されている。 また、説話に「熱は常に陰気によって、その働きが正常に保たれているが、今陰気が虚して陽を抑えることが出来ず、そのために熱が度を越えて内煩を生じる」と記されている。内熱による心煩は、この他黄芩・柴胡等にあるが、その働きに各々の特徴がある。</p>		